

戦争体験談(東京大空襲)

はまべももこ
濱邊百子さん

私は、昭和 20 年 3 月小学 5 年まで東京の中野区に住んでいました。戦争が始まったのは、昭和 16 年 12 月 8 日、小学 2 年生の時でしたので、始めは戦争がどんなものなのか分かりませんでした。戦争が始まると、学校も小学校から国民学校に変わりました。集団登校で、一番前と後ろは 6 年生、校門の近くにくると「歩調とれー」という号令がかかり、みんな一斉に両手を大きく振って行進のように歩きます。校門のそばに行くと、ピタッと止まって一礼。校庭の中に入ると正面玄関の横にある奉安殿にむかって最敬礼。(奉安殿とは天王陛下のお写真と教育勅語の謄本が入っている小さいお社みたいなもの) 教室に入るときも最敬礼。朝の朝礼があるときは、宮城(今の皇居)にむかって最敬礼とすごく礼を重んじる時代でした。電車に乗っていても宮城が近づくと、宮城に向かって最敬礼、靖国神社が近づくと、神社に向かって黙とう。そういうことをしていました。

学校ではよく避難訓練をさせられました。防空頭巾をかぶり、椅子を机の上にあげて、机の下に入ったり、指で目鼻耳を押さえて伏せの練習、どこをどうやって逃げようかという練習、6 年生になると男子は剣道、女子はなぎなた、グラウンドには丸太ん棒にむしろを巻いた人形のようなものを立てて、それに向かって竹槍を持って「えい。やーっ。」と突いて相手をやつけようとする訓練をよくしていました。学校だけではなく、燃えさかった時にはバケツリレーで消そうということで町内でははしごに上って屋根の上に水をかけたりしていました。

家では、灯火管制が始まりました。灯火管制とは、灯りが外に漏れないよう全ての窓に黒い布でカーテンをし、電灯には電球のかさの周りに黒い幕をかぶせて、遮光を少なくし、また夜はできるだけ一つの部屋にかたまって集まり、電灯の真下でお手玉をしたり、勉強をしていました。本当にどこの家も暗い生活でした。窓ガラスも今のように大きな硝子ではなく小さなガラスが組み合わさった窓でしたが縦横ななめに紙を貼って、空襲のときに破片が飛ばないようにしていました。たった一台あるラジオは、戦況を聞く大事な大事な必需品でした。今のようにテレビはないですし、「東部軍管区情報、千葉上空に敵機何機来たり」といった内容のことが流れてきます。楽しい番組なんてありませんでした。でも空襲が来ないときは子供たちは、みんな外で遊びました。元気よく上も下もなしに道路で石けりしたり、縄跳びしたり、快晴ドンとかして遊んでいましたね。落ち葉を集めて焼き芋を作ったこともあります。

食料は配給制になりました。この配給制は、どこの家庭も苦しめました。配給制は1週間分の食料が人数割、年齢割であたるんですが、大根1本、菜っ葉1束、じゃがいも、さつまいも等、配給だけでは満足するほど食べることはできません。親は子供たちに食べさせたくて、買い出しに行ったり、本当に大変だったと思います。金目のものは、ほとんど供出されてなくなっていますけど、残っていた着物などを持って、農家へ買い出しに行きました。初めは、お金で卵や野菜など分けてくれましたが、だんだん戦争が激しくなると働き手のお父さんやお兄さんが軍隊に行ってしまうのと、肥料もなくなり、農作物が作れず、農家の人も分けてくれなくなってきました。最後には、着物や帯を持って物々交換でした。国はこの食糧不足を補うために家庭菜園

を奨励して、何が何でもかぼちゃを作れという命令を出しました。家の庭に植えたり、歩道の片隅、当時は今のような歩道ではなく、土を踏み固めた歩道でしたので、道路に面した方じゃないところにかぼちゃや菜っ葉を植えたり、防空壕の上にも植えたりして食べていました。祖母が野原へ行って、アカザという草を取ってきて、胡麻和えにして食べさせてくれました。毎日毎日、雑炊ですね。少しのお米を大人数で食べるためには、大根やダイコンの葉っぱ、さつまいもの茎などいろんなものを雑炊にして食べていましたね。それでも足りないので、代用食としてジャガイモやサツマイモ、かぼちゃの蒸かしたもの、トウモロコシの粉、大豆の豆かすがあたったので、蒸しパンにして食べていました。それでもおなか一杯食べることは出来ないんです。おかわりは出来ない。だからいつもおなかをすかせて大変でした。

雑炊食堂というのがあって、それは国がしているんですが、それと別に食券食堂がありました。でも、食券食堂は、働いている人だけが食べることのできる場所だったので、一般の人でも食べることのできる雑炊食堂には、私たち子供も鍋を持って並びました。だいたい300人で打ち切りになってしまって、何人前かでおしまいだって言われて、「えーっ。当たらなかつた…。」と言って帰ってきたこともありました。おなかがすいて、とにかく一口でいいからご飯が食べたいな。美味しいものが食べたいなあってどれだけ思ったかしれません。食べられるということは、本当に命をつないでくれるということなんですね。でも親たちはもっともっと大変でした。自分たちが食べなくても、子供たちに食べさせたい気持ちでいっぱいです。だから私たちはいつも我慢。おなかすいたよーということは言えませんでした。それを言うと親を悲しませるような気がしたからです。あるとき母と一緒に買い出しに行

ったお母さんが、家に入るなり、ぱったり倒れてしまって。小さい子供は「母ちゃん寝てる？」って言ってましたが、栄養失調で死んでしまっていたんですね。そういうこともありました。おなか为空くってということは、食べられないってということは、本当に悲しいことでした。今の子供たちは本当に幸せですよ。お店に行けばいろんなものがたくさんあって、お金を出せば何でも食べられて。本当にいい時代です。それから、衣類も点数切符制になりました。私たちは、おさがりが当たり前でしたから、そんなに思いませんでしたが、1人につき年間100点の切符があたりますが、すべて使ってもスーツ1着、シーツ1枚しか買えません。私たちは新しいものを着たことはありませんでした。それでも母は「どんなにつぎはぎがしてあってもいいんだよ。きちんと洗濯してあれば。破けていなければ。」と言いました。だからいつもひじやひざにつぎがあたっているというのは当たり前でしたね。今みたいなアップリケというものではなくて四角いきれをそのまま当てたり、そんな感じでした。とにかく品物がなくて現金では何も買えませんでした。

学用品もそうでしたね。私たちは与えられたノートをととても大切に使いました。えんぴつも今のようにガーッと削るんじゃなくて、小刀で削って使ったから、短くなるまで削り、長いサックに入れて書いて使いました。それでも、もう削れなくなると親のところや先生のところを持って行って、交換してもらいました。教科書も一人1冊はあたりません。上からのおさがりなんですね。全てお金では何にも買えないんです。この頃、「欲しがりません。勝つまでは。贅沢は敵。」ということで我慢でしたね。とにかく我慢、我慢。

昭和19年に入ると空襲警報のサイレンが毎日鳴り響きました。警戒警報がなると学校から家にかえらなければならないんです。学校へ行くというの

が本当に少なくなってしまうまして、どうやって勉強していたんだろうと今でも思い出せないような感じなんです。12月の後半で1日だけ学校へ行ける日があったので行って見たら、小学5年生は、1学年200名ほどいたのに、男女合わせて20人ほどしかいないんです。当時は男女別だったので、一緒にということは初めてでしたが、みんないつの間にか疎開してしまって、誰もいなくなって、本当に寂しい思いをしました。

戦争が激しくなると、とにかく危険だということで田舎に親戚や知り合いがいない子供たちは、先生が引率して疎開する「疎开学園」というものがありました。子供たちは大勢で行くので、初めは遠足気分でした。だんだんいつ帰れるかわからないということが分かってくると、逃げ出そうとする子や泣きだす子などが出てきました。逃げ出した子を迎えに行く先生、そこで一生懸命に世話をしてくださるおばさん、また6年生などの上級生たちも連れ戻すため追っていきました。でも6年生は自分も疎開者なんですね。やっぱり親に会いたい。そういう気持ちはみんなと一緒になんです。でも連れ戻さなければならぬ。辛く苦しい思いをして、逃げ出した子供たちを連れ戻してきたそうです。昭和19年8月頃、第一次疎開が始まりました。最初の頃は、小学校3年生から6年生までの子供たちで集団生活に適応するかどうかということを先生方が調査して、大丈夫だろうという子供たちを選んで連れて行きましたが、昭和19年後半から20年になりますとそのようなことはいってられなくなり、最後は1年生から6年生までほぼ強制的に連れていかれたそうです。当時はカメラが各家庭になかったので、家族みんなで記念写真を撮りに写真屋さんへ行きました。親にとっても、もしかしたらこれが今生の別れになるかもしれないという思いで、写真をとりました。お母さんたち

は、とにかく「一目でいいから会いたい」と食べ物を持って疎開先へ会いに行く人もいました。しかし、疎開先に行っても自分の子供にだけ食べ物を与えることはできませんし、会えば離れがたくなるので、子供たちに会わないで陰からそっと子供の元気な様子を見て、涙ながらに帰ってきたそうです。疎開先で子どもたちは、軍隊の子供版とよばれるような厳しい生活をしながら、耐えてきました。

3年8か月続いた戦争も敗けて終戦を迎えました。1年数か月ぶりに、東京へ帰って見たら一面の焼野原、親もなく、家もなく独りぼっちになってしまった子供たちがたくさんいました。子供たちは孤児院へ預けられて、そこから巣立って社会へ出ていきました。疎開先ではおなかをすかせて、辛く苦しい生活をしてがんばってきたけれど、いざ帰ってみれば、さらに苦しい状況になっている子供たち。子供たちにとってみれば、一番大変な時期だったと思います。私も最初は集団疎開に行かされそうになりましたが、3月9日、10日の下町大空襲の様子を見てこれではダメだということで、家族みんなで親戚を頼って疎開する縁故疎開に切り替えました。

空襲が激しくなると夜も寝巻を着て寝ることができなくなって、着の身着のまま、子供は子供なりに、大人は大人なりに枕元にリュックを常において寝ていました。私は2歳になる弟を負ぶう役だったので、いつも負ぶい紐とかめのこを置いて寝ていました。かめのこは亀の甲羅のような形をした綿の入った布団です。寒いので、弟をおぶったその上にかめのこを被るんです。お風呂も入れず、しらみやノミがたくさんいて本当に不潔でした。しらみというのは、頭とかシャツの縫目において、髪の毛には卵が鈴なりになっているんです。新聞紙をひいて、目の細かい梳き櫛ですくとパラパラ一っつと落ちて、

それを集めて殺して。人間の生血を吸って生きているので、ノミでもシラミでも体についているととてもかゆいんです。ノミは畳のへりのところにおいて、畳の上をピョーンピョーンと飛んでいて、人の体の中に入ってきて、刺して血を吸います。親は洗濯をして煮沸しますが、またいつの間にか出てくるんです。大変でしたね。でも戦後はDDTをかけてもらって、お風呂にも入れるようになったから自然にいなくなりました。昭和20年になると、戦争は激しさを増し、昼夜かまわず敵機がやってきて空襲警報がありました。私が住んでいた中野にも昼は偵察機がやってきて、夜は編隊でやってきます。中野の練兵所のところから、敵機に向けて探照灯をあて、高射砲で狙って打ちます。でも当たらずに、その上を敵機がゆうゆうと飛んで行きます。高射砲が途中で破裂して、落ちてきた破片に当たってけがをする人もいました。私たちが子供ながらに「えーい。なんで当てないの。あの敵機やっつけちゃえばいいのに…」って思いましたね。怖いです。自分の心がそういう風になっていくのが。今考えると本当に怖いと思いました。でもそういう気持ちに普通にさせられてしまうんですね。戦争というのは。恐ろしいことだと思います。あるとき、B29と日本の飛行機がガキーンというものすごい音を立て、私たちの頭の上で体当たりしました。B29が悠然と去っていく中、日本の飛行機は、らせん状になって落ちてきます。もう下では、親たちが「子供たちは家の中に入ってろー」と言って、とびくちを持ったり、火ばたきを持ったり、バケツを持ったりして右往左往しています。どこに落ちるか分からない。私たちが怖くて怖くてならなかったんですが、運よく家から約500メートル離れたところの野原に落ちました。空襲警報が解除になってから、そこへ見に行ったら、もう憲兵が来ていて、縄がはってあってそばへはいけません

でした。その飛行機から1人落下傘で降りられたんですが、亡くなられたそうです。

またある時、廊下から外を眺めていました。小さいガラス窓には縦横ななめに紙が貼ってあるから、そこに誰がいるのか分からないと思うんですが、音もしないし、飛行機の形も見えないのに機銃掃射の硝煙が庭にバババババ一っと5、6発走り、私は思わずしゃがみました。身に危険がせまってきたと感じました。そして3月9日の東京大空襲です。中野は山の手でしたので、今回は山の手はやられないよ。下町だけだよと言われていたのですが、この日はB29が350機の大編隊でやってきました。ゴーッという地響きのようなものすごい音。そして爆弾がドーンと落ちる音、グワーっという家が揺れる音。焼夷弾がサササササーッと炸裂する音。空は燃えさかる炎で真っ赤なんですね。そして私たちの屋根の上をゴーッと大きな飛行機の影が旋回していくんです。怖かったです。山の手はやられないよと聞いていたので、私たちは押入れの上の段に布団を高く積んで、下の方にはいっていました。次の日、父親は焼け跡を見に行ってきました。お母さんが赤ちゃんをおぶって真っ黒になって焼け死んでいる。赤ちゃんの頭が吹っ飛んでお母さんと一緒に真っ黒になって死んでいる。頭も手足もなくなって真っ黒になって死んでいる。水を求めて、プールや川に入った人たちは、水ぶくれなのか火ぶくれなのかわからないけれども、ものすごいふくれた人になって重なり合って死んでいる。とにかく隅田川もプールも熱湯になったそうなんです。あまりにも残酷な光景に、父は涙が止まらなかったと言っていました。それを見て、疎開を嫌がる祖母を説得して、私たちはやっと縁故疎開に踏み切ったんですね。縁故疎開に踏み切ったときは3月10日も過ぎていましたので、荷造りしても

荷物が送れない状態でした。とにかく、ふとんだけでも送らないとといくつかは送りましたが、7段飾りの素敵な大正時代のおひなさまや五月人形、オルゴールの時計など送ることができなくて、すべて焼けてしまいました。

疎開するときは、母がすぐに疎開先でも使えるようにと、片手にはお鍋とお釜、しちりんを持ち、小さい子どもがたくさんいたので、もう片方の手にはおまるを持って上野駅に行きました。上野駅に着くと、人で人で溢れかえって、私たちはちゃんと富山へ疎開できるのかしらと不安になったほどです。

駅員さんが「50人のグループになってください」と言っていたので、小さな子どももみんな50人のグループに入れてもらいました。ところが、いざ改札になったら、グループどころかみんな我先にと乗り込みます。結局、私たちは窓を叩いて汽車に乗せてもらいました。一番最後に母が乗り込みましたが、いつも着ている白いエプロンのポケットから切符を線路に落としてしまいました。駅員さんと呼んでも来ないし、しょうがないとそのまま富山へ向かいました。朝には直江津に着いて、そこで竹の皮に包んだ2個入りの白いご飯のおにぎりとお弁当をひとつ買い、祖母と母、そして私たち子ども合わせて8人で分け合って食べました。とてもおいしくて嬉しかったことが今でも忘れられません。広い海を見たのも初めてで、海の上に小舟が3艘浮かんでいて、「わあ！素敵だな～」と思いながら、海の歌を歌って、富山へ行きました。

富山駅へ着いたら、焼け出されたと思ったのか何も言わないで改札口を通してくれました。ところが駅に着いてみると、疎開してきたのに富山の人が荷車に荷物を乗せて疎開しているではありませんか。1晩か2晩ほどして立山町へ向かい、そこでやっと空襲もなく安心することができました。

疎開してからも食べるために必死でした。農家の人も自分の家の分しか残していなくて、田舎へきたらお金で食材を分けていただけるかなと思っていたけれど、もらえず、やっぱり物々交換をして食べ物を分けてもらい、私たちを育ててくれました。だから今でも、祖母と母には大変感謝しております。中野の家も、5月25日に山の手大空襲で焼けてしまいました。東京には父と姉2人が残っていましたが、たまたま少しでも荷物を運びたいと富山に来ているときに焼けました。落ち着いてから東京へ戻って防空壕を掘り返してみると殆どの家財道具が焼けてしまいました。小皿9枚だけ焼けないで残っていました。戦前には卵焼きとかお魚とか美味しいものが、戦中はじゃがいもやさつまいも、かぼちゃなどがのっていたお皿です。高価なものではありませんが、私たち兄弟にとっては大切な宝物で、使わないで今でも大切にしています。

戦争というのは、人と人との殺し合いです。人を殺すことは犯罪ですよ。でもそれをさせてしまうのが戦争なんです。戦争して何が残るんだろう…。悲しみと苦しみだけです。本当に、私たちが自由に生活している、今が一瞬でなくなります。たくさんの方々（310万人ともいわれています）が戦地で、本土で亡くなられました。生きたくても生きられなかった人たちのことを思うと、私たちは命を大切にしなければとつくづく思います。生き残った私たちは、命を大切にしようとか兄弟仲良くしようとか、友達や両親を大切にしようとか、そんな気持ちがすごく強くなりました。大人になってみて、戦争中、敵の飛行機を落とすしちやえばいいのにと自分の中に人を殺してもいいんじゃないかという気持ちが芽生えたことが一番恐ろしいことだと思いました。

そんな気持ちに2度とならないようにずっと仲良く平和に暮らしていきたいと強く思います。戦争が起きて、悲しむのは弱いものばかりです。

戦争は絶対に絶対にしてはいけません。

お互いに思いやる心、感謝する心、我慢する心、ごめんなさいと言える心、物を大切にする心を育て実行してほしいです。皆にこんな心があれば、戦争も喧嘩もいじめもないと思います。

どうぞこれからも平和な日本がずーっとずーっと続きますように…。

世界では戦争している国がたくさんありますが、世界中から戦争がなくなり、世界の人たちが平和に幸せに暮らせるよう願っています。